

バルセロナ石彫り修業

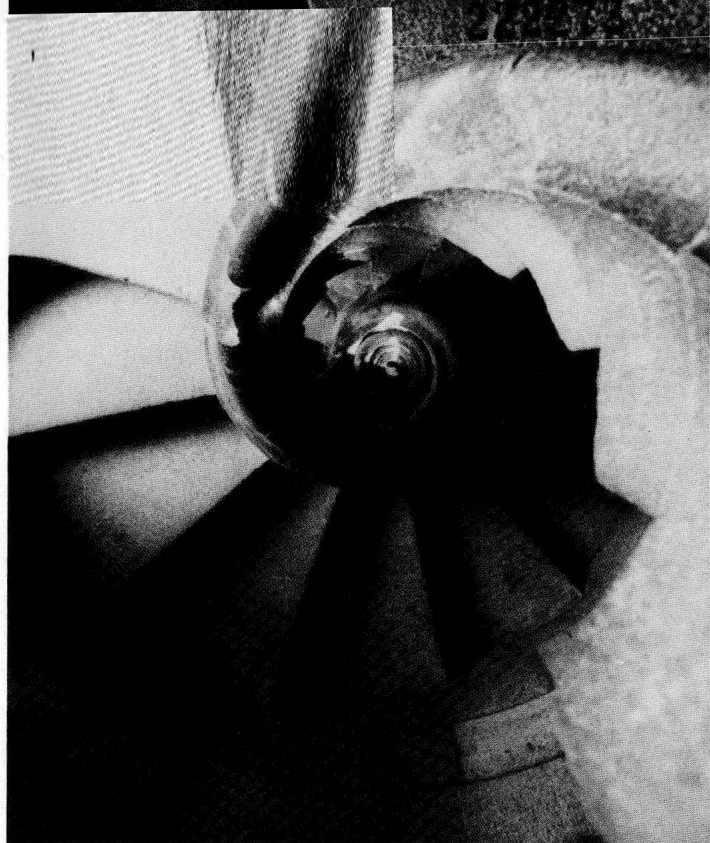


外尾悦郎

ちくま少年図書館 97

社会の本





バルセロナ石彫り修業

外尾悦郎

ちくま少年図書館 97

社会の本

著者略歴

1953年福岡県に生まれる。京都市立芸術大学卒。非常勤講師を一年間つとめ、日本をとびだす。現在、スペイン、バルセロナのサグラダ・ファミリア教会で、はじめての日本人彫刻家として活躍中。

筑摩書房／1985年初版
216pp.／20cm／四六判

1985年11月30日 第1刷発行 定価1200円

著者 そと お えつ ちゅう
外 尾 悦 郎

発行者 ぬの かわ かくざ えもん
布 川 角左衛門

発行所 ちく ま しよ ぼう
株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町 2-8

電話 東京 (291) 7651 (営業)

(294) 6711 (編集)

郵便番号101-91／振替東京6-4123

© E. Sotoo, Printed in Japan

厚徳社印刷・和田製本

(分類) 8044 (製品) 04097 (出版社) 4604

乱丁、落丁本の場合は御面倒ですが、小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

バルセロナ石彫り修業^ほ





もくじ

まえがき 7

石を彫^ほりたい 13

汽車のなかの出来事
アの建築に参加
サグラダ・ファミリ

日本をとびだすまで 23

内気で強情^{ごうじょう}な少年時代
をすることになっていた
分に気づく
いつのまにか彫刻^{やうく}
石が彫りたい自



最初の仕事 37

ガウディの秘密のひとつ 高倉健スタイル
のアブラハム 外国人のあいだで暮らした
めに

石彫りの現場で 51

他人の彫刻の手なおし 日本の職人とスペ
インの職人のちがい モノよりヒトが大
事 道具のちがい サグラダ・ファミリ
アの仕事ぶり ひとときわ人間くさい教会

サグラダ・ファミリアの職人たち 75

こわい職業病 SOTTO、逃げろ サ
グラダ・ファミリアをつくっている職人た



ち 哲学的な職人親子 ガウディ流の仕
事のすすめ方 現場監督のパストール

ガウディを受けつぐひとびと 102

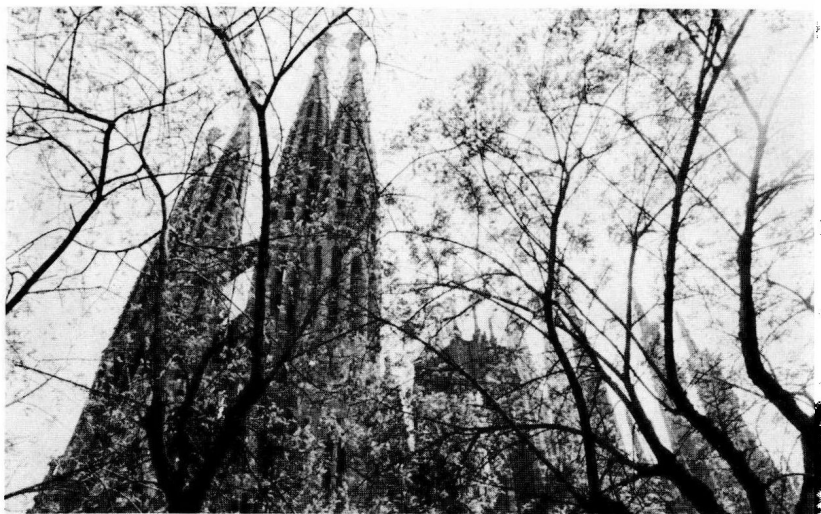
ガウディの方法とは ガウディの精神に学
ぶ ぼくがもつとも尊敬するプーチさん
ガウディをいかに受けつぐか

カタルーニヤの旗が語ること 120

ノンビリしたスペイン生活の終わり なん
の植物だろう うれしかった完成式典

ロサリオの間の間の修復 130

破壊された礼拝室^{はかい} すべてをまかされて



テーマはなんなのか
小指の謎なぞ
すぐれた作品をつくる条件

天使の彫刻にいどむ ちようこく 150

夢のような話 いちばんデカイ天使にしよ
う ついに勝った ハープの寸法が決ま
った モデルをだれにしよう ノラとハ
ープ 大きな石をまえにして ガウディ
の流儀りゆうぎが身についてきた 弦げんをどうする
か ガウディ広場を見おろす天使 喜び
と悲しみ

バルセロナの魅力 みりよく 194

「暮らし」そのものとの出会い すばらし
い友人たち ぼくの貴重な財産 ミロや



ピカソやダリやガウディを育てた町
「石
の旅人」のはじまり

あとがき

215

まえがき

——スペイン、バルセロナ。ここは建築家アントニオ・ガウディに会える街——。

ある洋酒会社のコマーシャル・フィルムに流れるナレーションの一節である。

うつしだされるカラフルで奇怪な数かずの建築は、見るひとの心に幻想をかもしだし、この世界の一角に、まだこんな不思議なところが残されていたのかというおどろきをあたえる。

イエスとその母マリア、そして養父ヨセフの「聖家族」にささげられた聖堂は、ほぼ一〇〇年前（一八八二年）に着工され、その建築を指揮したガウディが六〇年前に世を去ってからも、遺志をついでえいえいと築きつづけられ、その歩みはいつ終わるのか見当もつかない。

気も遠くなるようなこの大事業のただなかに、ふらりと舞いこんだただひとりの日本人、

それがぼくだ。

この本は、聖堂建設の現場で、彫刻家として、これまで七年間働きつづけてきたぼくの歩みをとおして、「誕生しつづける聖堂」のナマの姿、そこで働くひとびとの喜びや悲しみ、そして、今もなお現場に伝わる天才ガウディの思想を、描きだそうとしたものである。大学の彫刻科を出ただけで、なんの実績もない二五歳の青年が、ただ「石を彫りたい」という一心で、この教会にはいり、ハンマーを振るいつつ、見聞したこと、学んだこと、考えたこと、その足跡をお読み願えればさいわいである。

「而してやがて其の時が来たならば独逸ケルンの大伽藍の高塔にも亦羅馬サンペートル寺院のドームにも優るこの寺院が西班牙地中海岸近く聳ゆることと思ふ」

これは、ガウディが亡くなった直後に、サグラダ・ファミリアをおとずれ、世界にさきがけてこの偉業を紹介された今井兼次氏の文章である。ぼくは、このことばに次のことをつけくわえたい。

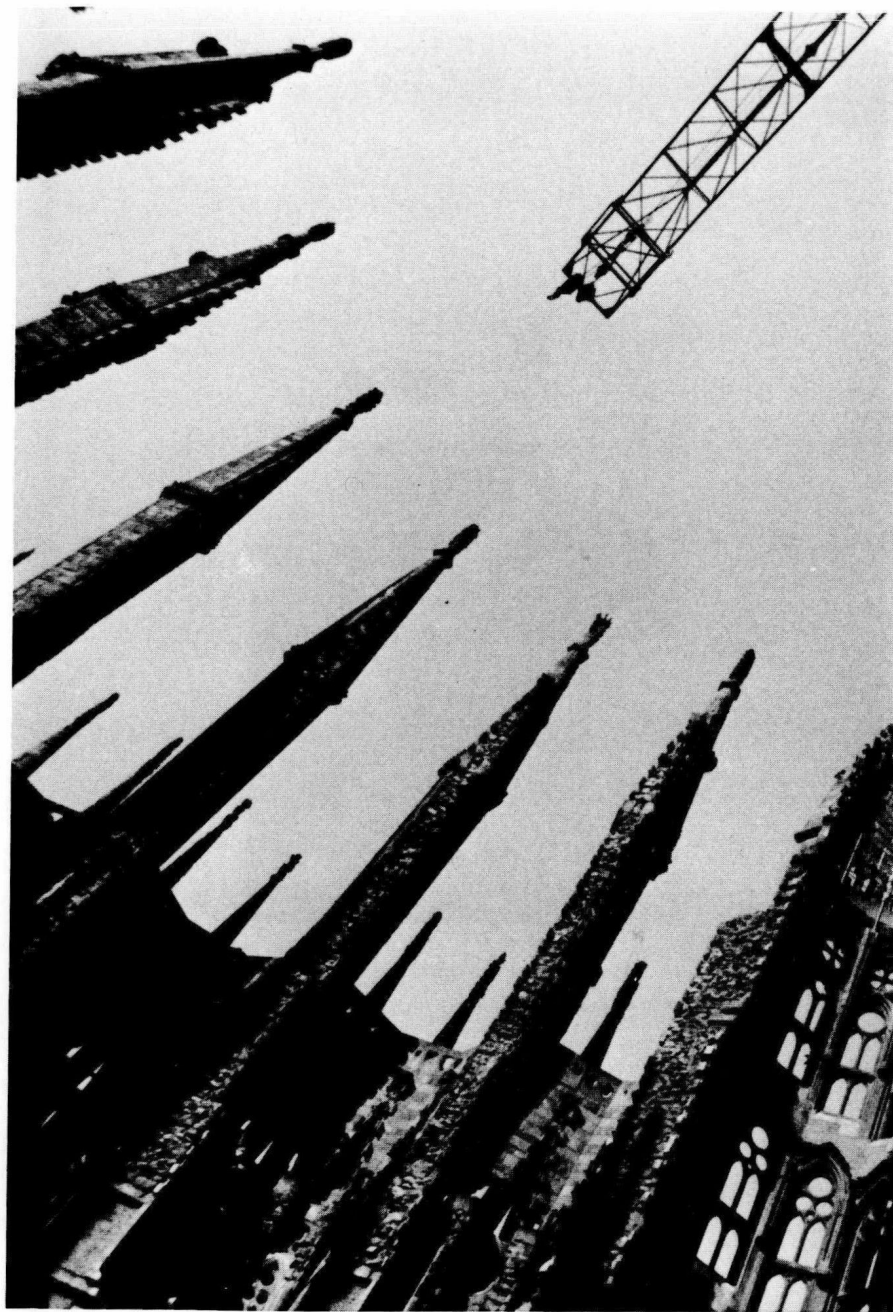
「完成した一八個のドームと鐘塔に、全音と半音に調律された多数の鐘がつるされ、それが音楽を奏でる時、この聖堂は人類がつくり得た世界最大の楽器となるであろう」
ぼくが生きているあいだに、そのひびきを耳にすることはできないかもしれない。

◀ 次ページは、建設中のサグラダ・ファミリア
全景

しかし、夢^{ゆめ}のなかにその音楽をひびかせながら、
ぼくはこれからも石を彫^ほりつつづけてい
きたい。

外尾悦郎^{そとお えつろう}







▲ アントニオ・ガウディ (1852—1926)

石を彫^ほりたい

汽車のなかの出来事

一九七八年初夏、ぼくがバルセロナで出会ったのは〈石〉であつた。

一〇〇年前から造りつづけて、完成までには、あと何百年かかるかわからないという話のデカサにひかれてやってきたサグラダ・ファミリア贖罪聖堂しよくさいせいどうの門をくぐって、まず目にはいったのは、塔でも彫刻ちやうこくでもなくて、そこらへんに無造作に積まれた石の山であつた。

「ここだ、オレの求めた場所は」

こう思うと、もう石しか目にはいらない。こんなに石があるんだから一個ぐらい彫らせてもらえるのではないだろうか。それがだめならせめて旅の記念に、一、二発たたかせて

くれないだろうか、と、思うのだが、それを伝えることばがない。パリからやってきたばかりのぼくにいえるのは、一から一〇までのスペイン語だけ。グラシアスもアディオスも知らないで、どうして「石を彫らせてくれ」などとたのめようか。

未練たらたらのまま、ぼくはそこを去った。

ここに来るまで二週間滞在したパリに、ぼくはうんざりしていた。たしかに文化はあるが、ぼくの感性に突き刺さってくるようなものは、ほとんどなくておもしろくなかった。

ホテルと美術館の往復、散歩もめしもいつもひとり。みな、つんつんしていてあいさつもしない。パリでは友だちができないと思うと、もっと気楽な国へ行きたくなった。

国を出る時は、パリの次はドイツと思っていた。というのは、ドイツには優秀な現代作家も多く、抽象彫刻の画廊も多いと聞いていたからだ。あわよくば、その画廊と話を付けて、自分の全能力を賭けた勝負をしてみたい。もしそれがだめなら、どこかの山で、手ごろな岩を見つけて、力いっぱいハンマーを振ってそいつをこなごなに砕いて帰ってこようと思っていたのだ。

しかし、パリで味わった「孤独な外国人」をドイツにもちこすのはとてもきつい。